

## 〔 1 〕 非等速円運動，等加速度運動（時間追跡），複数物体系

## 【メモ】

・問 1，問 2 は非等速円運動の問題．非等速円運動は以下の 2 式を連立．

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{運動方程式の中心成分} \\ \text{力学的エネルギー保存則} \end{array} \right.$$

・問 3，問 4，問 9 は複数物体系の問題．複数物体系は，以下の 2 式連立が基本．

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{外力のない方向成分の運動量保存則} \\ \text{全体の力学的エネルギー保存則} \end{array} \right.$$

しかし，問 3，問 4 は分離の問題ゆえ衝突の分類に含み，例外的に以下のように処理する．

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{衝突（分離）の直前直後の運動量保存則} \\ \text{問題で与えられた条件} \end{array} \right.$$

・問 6，問 7，問 8 は等加速度運動の時間追跡に関する問題．等加速度運動と単振動は，時間追跡でもエネルギーでも解くことができるが，今回の問題では時刻が問われているため時間追跡一択となる．

## 【解答】

問 1 力学的エネルギー保存則より，

$$\frac{1}{2}mv_B^2 + mg \cdot 2R = 0 + mg(h + 2R), \quad \therefore v_B = \sqrt{2gh}.$$

問 2 運動方程式の中心成分より，

$$\begin{aligned} m \frac{v_B^2}{R} &= N + mg \\ \therefore N &= m \frac{2gh}{R} - mg \leq 0, \quad \therefore h \leq \frac{R}{2} (= h_0). \end{aligned}$$

問 3 軽い小物体の速度が  $\vec{0}$  より，分離の直前・直後の運動量保存則から重い小物体の速度の鉛直方向も 0 とわかる．すなわち，ともに鉛直方向には速度成分 0 で落下するので，落下時間は等しい．よって，(あ)．

問 4 運動量保存則（水平方向成分），および条件（軽い物体の速度  $\vec{0}$ ）より，

$$\frac{1}{4}m \cdot 0 + \frac{3}{4}mv_D = mv_C \cos \theta, \quad \therefore v_D = \frac{4}{3}v_C \cos \theta.$$

問 5 点 D の位置は，点 C から  $\frac{L}{2}$  の位置にある．分離後，軽い物体の速度は  $\vec{0}$  ゆえ，水平方向に運動しない．よって， $\frac{L}{2}$ ．

問6 速さ  $v_C$  で角度  $\theta$  方向に斜方投射した物体の時刻  $t$  での位置は,

$$\begin{cases} x = v_C \cos \theta t, \\ y = v_C \sin \theta t - \frac{1}{2}gt^2, \end{cases}$$

であり,  $y = 0$  を満たす時刻は  $t = \frac{2v_C \sin \theta}{g}$  ゆえ,  $L$  は,

$$L = v_C \cos \theta \frac{2v_C \sin \theta}{g} = \frac{2v_C^2 \sin \theta \cos \theta}{g}.$$

さて, 改めて分離した時刻を  $t = 0$  とすると, 分離後の重い小物体の位置は,

$$\begin{cases} x = \frac{L}{2} + \frac{4}{3}v_C \cos \theta t, \\ y = \frac{v_C^2 \sin^2 \theta}{2g} - \frac{1}{2}gt^2, \end{cases}$$

であり,  $y = 0$  を満たす時刻は  $t = \frac{v_C \sin \theta}{g}$  ゆえ, 落下地点は,

$$x = \frac{L}{2} + \frac{4}{3}v_C \cos \theta \frac{v_C \sin \theta}{g} = \frac{L}{2} + \frac{2}{3}L = \frac{7}{6}L.$$

問7 摩擦面上での物体の運動方程式は, 加速度を  $a$  として,

$$\begin{cases} \frac{3}{4}ma = -\mu N, \\ 0 = N - \frac{3}{4}mg, \end{cases} \quad \therefore a = -\mu g.$$

よって, 点 E を通過する瞬間を改めて  $t = 0$  として,

$$v = \frac{4}{3}v_C \cos \theta - \mu g t = 0, \quad \therefore t_S = \frac{4v_C}{3\mu g} \cos \theta.$$

問8 物体の位置  $x$  は,

$$\begin{aligned} x &= \frac{4}{3}v_C \cos \theta t - \frac{1}{2}\mu g t^2 \\ &= -\frac{1}{2}\mu g \left( t - \frac{4v_C}{3\mu g} \cos \theta \right)^2 + \frac{8}{9} \frac{v_C^2}{\mu g} \cos^2 \theta \\ \therefore t &= \frac{4v_C}{3\mu g} \cos \theta \left( 1 - \sqrt{1 - \frac{9}{8} \frac{\mu g}{v_C^2 \cos^2 \theta} x} \right). \end{aligned}$$

問9 始状態 (点 A での状態) における弾性エネルギーを  $U$  とする. 始状態での系 (物体, 重力場, ばねからなる系) の力学的エネルギー  $E_{\text{ini}}$  は,

$$E_{\text{ini}} = mg(h + 2R) + U.$$

分離の前後で、系の力学的エネルギーが保存することから、点 D の水平面からの高さを  $H$  とすれば\*1,

$$\begin{aligned} \frac{1}{2} \frac{3}{4} m \left( \frac{4}{3} v_C \cos \theta \right)^2 + \frac{1}{2} \frac{1}{4} m \cdot 0^2 + mgH + 0 &= \frac{1}{2} m (v_C \cos \theta)^2 + mgH + U \\ \therefore U &= \frac{1}{6} m v_C^2 \cos^2 \theta = \frac{1}{3} g (h + 2R) \cos^2 \theta. \end{aligned}$$

よって、終状態のエネルギーは  $E_{\text{fin}} = 0$  ゆえ、

$$\begin{aligned} -\Delta E = E_{\text{ini}} - E_{\text{fin}} &= mg(h + 2R) + \frac{1}{3} g (h + 2R) \cos^2 \theta \\ &= \underbrace{mg(h + 2R) \left( 1 + \frac{1}{3} \cos^2 \theta \right)}. \end{aligned}$$

---

\*1 C を通過する瞬間の物体の速さ  $v_C$  は、力学的エネルギー保存則より  $v_C = \sqrt{2g(h + 2R)}$ .

## 〔2〕 電気回路，例外素子（ダイオード）

## 【メモ】

- ・電気回路の状態は，キルヒホッフ則，電荷保存則，素子の性質によって一意に決まる．
- ・問6，問7以外は，全て上記の3式で決定．
- ・問7は単振動の時間追跡に関する問題．

## 【解答】

問1 キルヒホッフ則，および電荷保存則より，

$$\begin{cases} E - \frac{Q_1}{C_1} - \frac{Q_2}{C_2} = 0, \\ -Q_1 + Q_2 = 0, \end{cases} \quad \therefore \frac{Q_2}{C_2} = \frac{C_1}{C_1 + C_2} E.$$

問2 キルヒホッフ則，および電荷保存則より，

$$\begin{cases} -\frac{Q_2}{C_2} - \frac{Q_3}{C_3} = 0, \\ Q_2 + Q_3 = \frac{C_1 C_2}{C_1 + C_2} E, \end{cases} \quad \therefore \frac{Q_2}{C_2} = \frac{C_1 C_2}{(C_1 + C_2)(C_2 + C_3)} E.$$

問3 キルヒホッフ則，および電荷保存則より，

$$\begin{cases} E - \frac{Q_1}{C_1} - \frac{Q_2}{C_2} = 0, \\ E - \frac{Q_1}{C_1} - \frac{Q_3}{C_3} = 0, \\ -Q_1 + Q_2 + Q_3 = 0, \end{cases} \quad \therefore \frac{Q_2}{C_2} = \frac{C_1}{C_1 + C_2 + C_3} E.$$

問4 誘電体挿入後の各コンデンサに帯電している電荷は，問3において  $C_3 \rightarrow \varepsilon_r C_3$  とすれば，

$$Q_1 = \frac{C_1(C_2 + \varepsilon_r C_3)}{C_1 + C_2 + \varepsilon_r C_3} E, \quad Q_2 = \frac{C_1 C_2}{C_1 + C_2 + \varepsilon_r C_3} E.$$

題意より， $\frac{Q_2}{C_2} = 2\frac{Q_1}{C_1}$  ゆえ，

$$\frac{C_1}{C_1 + C_2 + \varepsilon_r C_3} E = \frac{2(C_2 + \varepsilon_r C_3)}{C_1 + C_2 + \varepsilon_r C_3} E, \quad \therefore \varepsilon_r = \frac{C_1 - 2C_2}{2C_3}.$$

問5 ダイオード D に電流が流れないと仮定すると，キルヒホッフ則より，回路に流れる電流を反時計回りを正として，

$$\begin{cases} -\frac{Q}{C} - L \frac{dI}{dt} = 0, \\ I = \frac{dQ}{dt}, \end{cases} \quad \therefore \frac{d^2 Q}{dt^2} = -\frac{1}{LC} Q.$$

よって、 $Q$  は振動中心  $Q = 0$  の単振動を行い、初期条件  $Q(0) = CE$ ,  $I(0) = 0$  より、

$$\begin{cases} Q = CE \cos\left(\frac{t}{\sqrt{LC}}\right), \\ I = -E\sqrt{\frac{C}{L}} \sin\left(\frac{t}{\sqrt{LC}}\right). \end{cases}$$

さて、ダイオードの下の分岐点を B, 抵抗の上の分岐点を A とすると、B に対する A の電位  $V_{BA}$  は、

$$V_{BA} = +\frac{Q}{C} = E \cos\left(\frac{t}{\sqrt{LC}}\right)$$

であり、 $\cos\left(\frac{t}{\sqrt{LC}}\right) < 0$  となる  $t = \pi\sqrt{LC}$  まではダイオードに電流が流れないことがわかる。よって、回路に流れる電流の大きさの最大値は、はじめの振動回路 (LC 回路) のときに最大値をとり\*2、

$$I_0 = E\sqrt{\frac{C}{L}}.$$

問 6 問 5 より、振動電流の大きさが最大のときを考えて、公式より、

$$H_0 = nI_0.$$

問 7 問 5 より、 $\sin\left(\frac{t}{\sqrt{LC}}\right) = 1$  を満たす時刻を考えて、

$$\frac{t}{\sqrt{LC}} = \frac{\pi}{2}, \quad \therefore t = \frac{\pi}{2}\sqrt{LC}.$$

問 8 キルヒホッフ則より、回路に流れる電流を時計回りを正として、

$$-L\frac{\Delta I}{\Delta t} - RI_0 = 0, \quad \therefore \frac{\Delta I}{I_0\Delta t} = -\frac{R}{L}.$$

問 9 キルヒホッフ則より、

$$-L\frac{\Delta I}{\Delta t} - RI_0 = 0, \quad \therefore \frac{dI}{dt} = -\frac{R}{L}I.$$

この微分方程式から、 $I$  は時間とともに減少していくことがわかる。さらに、 $I$  の時間変化率は  $I$  に比例していることから、 $I$  の時間変化率の大きさは時間の増加とともに減少していく。

以上より、 $t = t_0$  までは sin 型のグラフとなり (あ) のようになり、 $t = t_0$  以降は減少していくが、その減少の割合は時間発展とともに小さくなっていくので (か) のようになる。

\*2 今は上の議論から振動電流の振幅をそのまま用いたが、回路のエネルギー保存則より決定してもよい。

## 【補足】問9のグラフ

$t = t_0$  までの、コイルに流れる電流の大きさは問5より、

$$|I(t)| = E\sqrt{\frac{C}{L}} \left| \sin\left(\frac{t}{\sqrt{LC}}\right) \right|.$$

$t = t_0$  以降は、キルヒホッフ則より、

$$\frac{dI}{dt} = -\frac{R}{L}I$$

であり、 $t = t_0$  で  $I(t_0) = E\sqrt{\frac{C}{L}}$  ゆえ<sup>\*3\*4</sup>,

$$I(t) = E\sqrt{\frac{C}{L}} e^{-\frac{R}{L}(t-t_0)}.$$

以上をまとめて、

$$|I(t)| = \begin{cases} E\sqrt{\frac{C}{L}} \left| \sin\left(\frac{t}{\sqrt{LC}}\right) \right| & (0 \leq t < t_0), \\ E\sqrt{\frac{C}{L}} e^{-\frac{R}{L}(t-t_0)} & (t_0 \leq t). \end{cases}$$

\*3 コイルの性質である電流の連続性による。

\*4 ここでは、電流の正の向きは時計回りを正としている。

### 〔3〕 A：熱力学の基本処理，断熱過程，熱気球

#### 【メモ】

- ・問 1, 問 2, 問 5 は熱力学の基本的（むらがなく熱あり）な過程に関する問題。定石は，可動部分のつりあいから圧力の決定，状態方程式から温度の決定。内部エネルギー変化を公式，気体のする仕事を  $P-V$  図の面積評価，熱力学第 1 法則を通じて熱を計算。今回は，温度が与えられていて，ピストンの面積が不明なため，体積（始状態では面積，それ以降は高さ）の決定方程式となる。
- ・問 3, 問 4 は準静的な断熱過程に関する問題。準静的な断熱過程では，ポアソンの公式から圧力が体積の決定，状態方程式から温度の決定。熱力学第 1 法則は仕事の決定方程式となる。
- ・熱効率は定義を押さえる。

#### 【解答】

問 1 始状態の状態方程式より，ピストンの面積は，

$$p_0 SL = RT_0, \quad \therefore S = \frac{RT_0}{p_0 L}.$$

ピストンのつりあいより内部気体の圧力は  $p_0$  であり，状態方程式より，

$$p_0 \cdot \frac{1}{2} SL = RT_B, \quad \therefore T_B = \frac{1}{2} T_0.$$

問 2 内部エネルギー変化は公式より，

$$\Delta U_{AB} = \frac{3}{2} R(T_B - T_0) = -\frac{3}{4} RT_0.$$

気体が外部にした仕事は  $p-V$  グラフより，

$$W_{AB} = p_0 \left( \frac{1}{2} SL - SL \right) = -\frac{1}{2} RT_0.$$

よって，吸熱量は熱力学第 1 法則より，

$$Q_1 = \Delta U_{AB} + W_{AB} = -\frac{5}{4} RT_0.$$

問 3 状態 C におけるピストンの位置を  $z$  とすると，ポアソンの公式，および状態方程式より，

$$\begin{cases} \alpha p_0 (Sz)^\gamma = p_0 (SL/2)^\gamma, \\ \alpha p_0 Sz = RT_C, \end{cases} \quad \therefore z = \frac{1}{2} \alpha^{-\frac{1}{\gamma}} L, \quad T_C = \frac{1}{2} \alpha^{1-\frac{1}{\gamma}} T_0.$$

問 4 ポアソンの公式より，

$$\alpha p_0 (Sz_D)^\gamma = p_0 (SL)^\gamma, \quad \therefore z_D = \alpha^{-\frac{1}{\gamma}} L.$$

問5 状態方程式より，状態Dにおける温度  $T_D$  は，

$$\alpha p_0 S \alpha^{-\frac{1}{\gamma}} L = RT_D, \quad \therefore T_D = \alpha^{1-\frac{1}{\gamma}} T_0.$$

よって，内部エネルギー変化は公式より，

$$\Delta U_{CD} = \frac{3}{2} R (T_B - T_C) = \frac{3}{4} \alpha^{1-\frac{1}{\gamma}} RT_0.$$

気体が外部にした仕事は  $p-V$  グラフより，

$$W_{CD} = \alpha p_0 (S z_D - S z) = \frac{1}{2} \alpha^{1-\frac{1}{\gamma}} RT_0.$$

以上から，吸熱量は熱力学第1法則より，

$$Q_2 = \Delta U_{CD} + W_{CD} = \frac{5}{4} \alpha^{1-\frac{1}{\gamma}} RT_0.$$

問6 定義より，

$$e = \frac{W_{1周}}{Q_{吸収}} = \frac{Q_{吸収} - Q_{放出}}{Q_{吸収}} = 1 - \frac{Q_1}{Q_2} = 1 - \frac{5RT_0/4}{5\alpha^{1-\frac{1}{\gamma}}RT_0/4} = \underbrace{1 - \alpha^{\frac{1}{\gamma}-1}}.$$

問7 問6より，

$$1 - \alpha^{\frac{1}{\gamma}-1} \leq \frac{1}{2}, \quad \therefore \alpha \geq \underbrace{4\sqrt{2}} (= \alpha_{\min}).$$



**B : 光の干渉**

【メモ】

・干渉条件は、位相差で考える。

$$(\text{位相差}) = \frac{2\pi}{\lambda}(\text{経路差}) = \begin{cases} 2m\pi & (\text{強めあい}), \\ (2m-1)\pi & (\text{弱めあい}). \end{cases}$$

ここで、 $m$  は整数であり、屈折率  $n$  の媒質中では  $\lambda \rightarrow \frac{\lambda}{n}$  とし、反射によって位相が  $\pi$  ずれた場合、左辺の位相差に  $\pi$  を足せばよい。

【解答】

問 1 解答図 1 のように射線と考えて、

$$\ell_x = \ell - x \sin \theta.$$

問 2 経路 Y の光の光路長を  $\ell_Y$  とし、 $m$  次の明線が生じる位置を  $x_m$  とする。強め合いの条件は\*5、

$$\frac{2\pi}{\lambda} \{ \ell_Y - (\ell - x_m \sin \theta) \} = 2m\pi.$$

よって、明線間隔は、

$$\begin{cases} x_m \sin \theta = m\lambda - \ell_Y + \ell, \\ x_{m+1} \sin \theta = (m+1)\lambda - \ell_Y + \ell, \end{cases} \quad \therefore x_{m+1} - x_m = \frac{\lambda}{\sin \theta}.$$

問 3  $m$  次の明線の位置を  $x'_m$  とすると、強め合いの条件は、

$$\frac{2\pi}{\lambda} \{ \ell_Y - (\ell - x'_m \sin \theta + 2D) \} = 2m\pi.$$

よって、明線のずれは、

$$\begin{cases} x_m \sin \theta = m\lambda - \ell_Y + \ell, \\ x'_m \sin \theta = m\lambda - \ell_Y + \ell + 2D, \end{cases} \quad \therefore \Delta x_1 = x'_m - x_m = \frac{2D}{\sin \theta}.$$

問 4 容器 A の寄与を除いた光路長を  $\ell'$  とする。 $m$  次の明線の位置を  $x''_m$  とすると、強め合いの条件は、

$$\frac{2\pi}{\lambda} [ \ell_Y - \{ \ell' - x''_m \sin \theta + 2D + 2(1+\alpha)L \} ] = 2m\pi.$$

よって、明線のずれは、

$$\begin{cases} x'_m \sin \theta = m\lambda - \ell_Y + \ell' + 2D + 2L, \\ x''_m \sin \theta = m\lambda - \ell_Y + \ell' + 2D + 2(1+\alpha)L, \end{cases} \quad \therefore \Delta x_2 = x''_m - x'_m = \frac{2\alpha L}{\sin \theta}.$$

\*5 鏡による位相のずれがあるが、それぞれ  $\pi$  ずつずれているため、位相差を計算すれば反射による位相のずれの寄与は 0 となる。

問5 時刻  $t$  において,  $x = 0$  に各経路から届く電場は, それぞれ,

$$E_X(t) = E_Y(t) = E_0 \sin(\omega t).$$

経路 X から届く光 (伝播速度  $c$ ) について, 位置  $x = 0$  に波面が届く時間を  $t$  とすると, 位置  $x$  に同一の波面が届く時刻は  $t$  より  $\frac{x \sin \theta}{v}$  だけ早い時刻に届くので, 位置  $x$  で観測される電場の振動は,

$$\left( \begin{array}{l} \text{位置 } x \text{ での} \\ \text{今の電場} \end{array} \right) = \left( \begin{array}{l} x = 0 \text{ での} \\ x \sin \theta / c \text{ 後の電場} \end{array} \right)$$

ゆえ,

$$\begin{aligned} E_X(x, t) &= E_X \left( 0, t + \frac{x \sin \theta}{c} \right) \\ &= E_0 \sin \left\{ \omega \left( t + \frac{x \sin \theta}{c} \right) \right\} \\ &= E_0 \sin \left( \omega t + \frac{2\pi \sin \theta}{\lambda} x \right). \end{aligned}$$

よって, 位置  $x$  で観測される電場の強度は,

$$\begin{aligned} I(x) &= \overline{\{E_X(x, t) + E_Y(x, t)\}^2} \\ &= E_0^2 \overline{\left\{ \sin \left( \omega t + \frac{2\pi \sin \theta}{\lambda} x \right) + \sin(\omega t) \right\}^2} \\ &= E_0^2 \overline{\left\{ \sin(\omega t) \cos \left( \frac{2\pi \sin \theta}{\lambda} x \right) + \cos(\omega t) \sin \left( \frac{2\pi \sin \theta}{\lambda} x \right) + \sin(\omega t) \right\}^2} \\ &= E_0^2 \underbrace{\left\{ 1 + \cos \left( \frac{2\pi \sin \theta}{\lambda} x \right) \right\}}. \end{aligned}$$